第５回立教大学諮問委員会　記録

日　時：2016 年 3 月 9 日（金）14：00～17：00
場　所：太刀川記念館 2 階会議室
出席者：＜委員＞　林良造（明治大学研究・知財戦略機構特任教授、東京大学客員教授）
橘フクシマ咲江（G&S Global Advisors Inc. 代表取締役社長）
佐々木順子（ﾌｧｲｱ･ｱｲ株式会社（FireEye as a Service）ﾊﾞｲｽﾌﾟﾚｼﾞﾃﾞﾝﾄ）
インクランセルジオ（在日メキシコ大使館公使）
中村富安（独立行政法人日本貿易振興機構参与）
一力雅彦（河北新報社代表取締役社長）
＜大学＞　吉岡知哉（総長）、白石典義（統括副総長）、加藤睦（副総長）、
原田久（副総長）、塚本伸一（副総長）、山口和範（副総長）、
西田邦昭（副総長）、松井秀征（総長室長）

１．提言への対応状況

標記について、白石統括副総長より、配布資料「立教大学の国際化～前回の提言への対応状況～」にそって、対応状況について報告がなされた。

（１）短期的な課題への対応状況
①全般
・多様な環境の提供：立教サービスラーニングセンター開設・科目の展開
・思考力・変革力・協働力の育成：GLAP の開設、グローバル教養副専攻の開始
・研究費不正防止：各種規程の整備、e-learning の受講
②国際化関連
・聖公会ネットワーク：CUAC アジア大学とのサービスラーニング科目の協働
・大学全ての環境の国際化：教員任用時の要件反映と可視化、職員海外研修
・一貫したグローバル人材育成：学院教育研究フォーラム、小～高海外体験
・大学の姿勢・実践：海外協定校数の拡大、日本語短期プログラムの実施
（２）中・長期的な課題への対応状況
①全般
・不変の哲学・環境変化への柔軟な対応：「RIKKYO VISION 2024」の策定
・学修期に合わせた学び：「Rikkyo Learning Style」の開始
・卒業生の関わり：立教グローバル/ローカルキャリア支援ネットワークの構築
②国際化関連
・立教の強み：「立教サービスラーニング」「グローバル教養副専攻」の開始
・グローバリゼーションの明確化：「RIKKYO VISION 2024」の策定
・リベラルアーツの具現化：GLAP の構想

（３）国際化推進の取組状況（主な数値目標の 2015 年度時点での達成状況）

・単位修得を伴う海外留学経験者数⇒934 名

・外国人留学生数⇒708 名

・海外協定大学数⇒150 校

・外国人教員比率⇒16.3％

（４）GLAP の構想

・主な特徴：

－全ての授業科目を英語で実施

－少人数で人文科学、社会科学、自然科学を幅広く学ぶ

－全ての学生が 1 年間の海外留学

－留学までの 1 年半は全寮制

－学生生活の全てを学びの機会に

・カリキュラム：

－4 年間を「導入・形成期」「留学期」「完成期」に分け構築

・海外留学先：

－サウス、ニューヨーク州立、トリニティ、バーモント大学等

（５）大学院リンケージ・プログラムの構想

プログラムの概要：インドネシアの国立大学 6 校との連携体制の構築

主な特徴：－英語のみで修了できる研究科横断型プログラム

－人材育成による知的国際貢献

－新たな学位、カリキュラムを設置

－多様な受入れのバリエーション（ダブルディグリープログラム等）

２．RIKKYO VISION 2024、2016 年度大学行動計画

標記について、吉岡総長より、配布資料「2016 年度の立教大学」にそって、今後の計画等について報告がなされた。また、作成過程を含む「RIKKYO VISION 2024 MOVIE」が紹介された。

（１）大学執行部体制と役割分担：

副総長が部局の長を兼ねることにより、政策と現場の運営を接続する役割を果たしている。

（２）大学の意思決定のための仕組み：

総長のリーダーシップによる大学マネジメント体制

（３）総長による基本方針と行動計画：

就任時の「大学運営の基本方針」と各年度の「行動計画」により、PDCA サイクルを構築

（４）RIKKYO VISION 2024：

－2024 年の創立 150 周年を目標年度とした将来像「Lead the Way」

－Global×Local×Innovation×Tradition を機軸に、ビジョン実現のための 3 つのバリュー（Lead for Learning, Lead for Globalization, Lead for Future）を設定

－3 つのバリューに基づく 9 つのアクションプランを設定

－中堅教職員、学生、卒業生等によりボトムアップで作成

（５）RIKKYO Learning Style：

2016 年度からスタートする立教大学の新しい学びのスタイル

－学生が目標に向かって 4 年間の学びを自分で組み立てる

－4 年間を「導入期・形成期・完成期」の学修期に分け段階的に学ぶ

－正課、正課外活動を統合的に捉える

３．2016 年度以降の課題［諮問委員からの提言］

(1)国際化関連の課題

・グローバリゼーションを推進する次の段階として、グローバル・イシューを学生が肌で感じられるプログラム等が必要である。立教大学自身が、TPP のような論争的なグローバル・イシューについて考える拠点となることで、海外から多くの留学生を招くことにも繋がる。立教大学には「経済」「政治」「社会」といった社会科学系の研究者が多くおり、こうした研究者のリソース活用により一層の国際化が推進できる。

・自らの経験を下級生に伝えるスチューデントボディ制度のような、学生が相互に学業や日常生活を支え合う仕組みが重要である。その際、継承性のある制度構築が大切である。

・GLAP は魅力的なプログラムであるが、学力のみではなく、自ら学ぶ意欲を持った学生の入学が大切である。厳しいカリキュラムではあるが、その経験が将来の自分に繋がっていくことを受験生・家族にしっかり伝えることが必要である。

・国際的な人材の養成を中心にグローバリゼーションを牽引するという立教の姿勢について、ビジネスや外交など国際的な領域で活躍する人々に理解と協力を得て、サポーターのネットワークを構築することが重要である。

(2)全般的課題

・正課、正課外、留学等により様々な経験をすることで、組織の中で自分の役割が自覚でき、チームプレーがとれる人が育成される。「Rikkyo Learning Style」では、こうした観点から、物事に主体的に取組み、自ら考えることができるイノベーティブな人材を輩出することが重要である。

・優れた教育を展開する立教としての広報をさらに展開すべきである。そのためには、学生の「顔」が見える伝え方も大切である。
・学院及び大学執行部について、構成員のダイバーシティ推進が必要である。
・観光立国を目指す日本において、世界のホテル経営などグローバルな視点で伝統ある観光学部の卒業生に更に活躍して欲しい。
・VISION や行動計画は、その理念や内容を構成員に浸透させることが大切である。今後は、進捗状況の情報共有、フィードバックが不可欠である。
・「陸前高田サテライトキャンパス」構想は、東日本大震災復興支援とともに、学生・教職員の学びの場として実現して欲しい。

以上

第 5 回立教大学諮問委員会